

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】鳥谷部 輝彦

【所属】(助成決定時)東京芸術大学音楽学部

【研究題目】

奏舞と奏楽による法会の音楽的設計 —中世の比叡山における顕密法会を事例として—

【研究の目的】

奈良時代から現代まで、仏教法会では雅楽が奏でられてきた。先行研究で分析されてきた法会の事例は、奈良時代の東大寺供養会、平安時代の法成寺供養会・法勝寺供養会などの、主に顕教に基づく「舞樂法会」(舞樂の役割を重視した法会)であった。この種の法会は長い歴史の中で大規模に執行され続けてきたため、よく知られている。その一方で、比較的小規模な法会・修法ではあるが、密教においても舞樂と楽器演奏を伴う法会・修法、および舞樂を伴わず楽器のみの雅楽演奏を伴う修法があったことが、先行研究では見逃されている。そのため本研究では天台宗比叡山に注目し、雅楽を伴う密教の法会・修法を整理した。対象時期は、諸史料を照合しやすい鎌倉時代を主とした。顕教の法会と密教の法会・修法における雅楽の奏舞(舞と楽器演奏)と奏楽(舞を伴わず楽器演奏のみ)の方法を、総合し類型化することが、本研究の最終的な目的である。

【研究の内容・方法】

主に依拠した史料は、台密の書が『行林抄』『阿娑縛抄』『門葉記』であり、仏事に関してはこの三書を照合した。雅楽書は『教訓抄』である。以上の史料は、平安時代末から鎌倉時代のほぼ同時代に編纂されており、密教修法を仏事と楽事の双方から分析することができる。従って、対象時期をこの時代に定めた。

対象事例は、比叡山僧が導師または大壇阿闍梨を勤め、雅楽の奏舞奏楽を伴う法会・修法である。そのうち、時代や地域等による変化が比較的小さい「七仏薬師法」という修法に研究を集中することとした。この修法は数日間(基本的には7日間)に渡って修され、道場には大壇・護摩壇・十二天壇・薬叉壇・聖天壇が配置される。修法の目的は息災または増益のためであるが、中宮御産御祈や国家安泰、天変地異の鎮め、敵国降伏などの事例がある。比叡山四箇大法の一つであり、他寺・他宗は修さない。『本願薬師経』と『七仏薬師経』に基づくが、後者には「伎楽」(雅楽)を用いることが書かれている。雅楽を伴う日は、開白日(初日)と結願日(最終日)である。

分析の方法は、(1)『門葉記』などの古記録を整理した。(2)七仏薬師法を修するにあたっての目的、場所、仏事に対応する使用曲の各項目について、約200年の事例を時系列で整理し、作表した。(3)横道万里雄『寺事の構造』(2005)に基づいて、一般的な次第の構造を整理し、開白日と結願日の次第を作表した。(4)特に雅楽に関する分析では、人員の構成(出自)と楽器編成を、同時代の他の法会と比較し、整理した。(5)曲の分析では遠藤徹『平安朝の雅楽』(2005)の均調理論を用いて、使用曲の変遷を辿った。(6)道場指図によって、奏楽場所を確認した。

【結論・考察】

七仏薬師法では、雅楽は舞を伴わずに奏楽される。雅楽が奏でられる開白日と結願日の次第における奏楽箇所は似ており、清め(導入部)、供養(主題部)、廻向(結尾部)のそれぞれで奏楽された。曲目は限られ、平調の調子・音取・萬歳楽・太平楽破・慶雲楽の事例が多い。楽器編成は、標準的には管(笙、篳篥、龍笛)と打(太鼓、鞆鼓、鉦鼓)であるが、行道列には壺鼓・奚婁鼓が含まれたようである。楽人は京都方楽人と興福寺楽人で構成されていたようであるが、あまり詳しくは判明しない。奏楽場所は、道場外の廊下あるいは道場前庭に設けられた。以上のような奏舞奏楽法は顕教の「十種供養会」に似ているが、それに比べると雅楽は小さく扱われている。今後の課題として、本研究期間では整理しきれなかった台密の「安鎮法」「舞樂曼荼羅供」についてさらに調査を続け、比叡山の顕密法会における雅楽を総合的に整理したい。